



ファカルティ・ ディベロプメント

牛島 和夫

(九州産業大学情報科学部)

ushijima@is.kyusan-u.ac.jp

ファカルティ・ディベロプメント (Faculty Development: 以下FDと略す) を直訳すると「教授団・開発」となる。何を開発するのが、小中高の教員と違って大学教員に採用されるのに形式的な免許は必要ない。これまで大学教員を採用する際にはほとんどの場合、研究業績が重視されてきた。教育力についてはほとんど評価の対象にならなかった。ところが、進学率の高まりや、少子化の影響で、教育力をきちんと吟味しなければならない時代がやってきた。これに対して、教授団が組織として、授業方法や授業内容を吟味し教育力の開発・向上に当たる活動というのがFDに対する大方の理解である。学部や学科内にFD委員会が組織され、FDに関する講演会や研修会を実施している。実施しないよりした方がよいに決まっているが、どちらかといえば上からの取り組みで、下からの盛り上がり欠けるというのが現状ではないかと思う。

FDという言葉を我々一般教員が最初に目にしたのは1990年代の初めに大学設置基準の大綱化が定められた頃であったと思う。同時に目にした、シラバスの作成や学生による授業評価ほどは理解されずにすぎってしまった。シラバスの作成は、1990年代の前半から各大学が次第に取り入れるようになり、学生による授業評価も1990年代後半から多くの大学で実施されるようになってきた。考えてみれば、学生による授業評価は、教師の授業方法等に関する計測手段の1つである。ほかには、授業参観や、同僚による評価、外部評価もある。計測がなければ次の行動に移れない。シラバスの作成は、当該教育プログラムの中で担当授業を位置づけ、学習・教育目標を掲げ、評価基準や方法を明らかにして、講義の概要と流れを学生に提示するものである。JABEE (日本技術者教育認定機構) が認定基準として掲げてるものと矛盾しない。シラバスも授業評価もFDの構成要素だった

ことに気が付くのである。教育方法等について何も訓練を受けていない初任者の研修を受け持つのもFDであると聞けばFDの役割が分かる。

さて、授業方法を点検するには自分の授業をビデオに収録して見直すのが効果的だ。筆者は前に勤めていた九州大学大学院の講義で、定年退職までの数年間、教室に家庭用ビデオカメラを持ち込んで、学生による発表(1学期に1人で3回行う)とその後の討議を毎回すべて収録した。受講生に対して、3回のテープを視聴させ自分の発表や方法について自己評価を報告させた。自己を客観的に眺めると、欠点や長所に気が付く。それを修正しあるいは伸ばして3回の発表の中でさまざまな成長がある。他人の発表方法の良いところを探す批判力もついてくる。もっとも、撮影者を継続的に確保するのは結構大変だった。

現在勤務している九州産業大学情報科学部は2002年4月に開設した新しい学部である。開設の1年前に就任予定の教員が一堂に会した際に、専任教員によるすべての講義をビデオ収録することを提案した。2人の先生から積極的な支持を得て設置することが決まった。情報科学部棟を新築する際に全講義室にビデオカメラとマイクを設置し、情報科学部教員が行うすべての講義を録画・録音してWebで配信する講義記録システムを導入した。このシステムを経済的・効果的に運営することが必須である。初期経費は建物新営費用の一部に吸収できるが、撮影・録画のために特別の人手を要したのでは人件費で運用が成り立たない。そこで事前に講義スケジュールを登録し、講義の収録からWebの配信まで自動的に行うことにした。

このシステムは、学生にとって復習したいときにいつでも利用できるということ、教員にとっては自分の講義を見直し、また他の教員の良いところを学ぶための道具にしたいということである。多くの教員は授業をどのように行えば学生に分かってもらえるかそれぞれ独自の工夫をしているものである。さまざまな工夫が個人の範囲にとどまっている。これを教員の間で共有しようというのである。

2002年度に運用を開始してほぼ2年を経過し2年分の映像と音声蓄積している。FDにとってこのシステムへの依存は高まっている。一部の教員の特定の講義ではなくすべての教員が参加している意義が大きい。九大でのビデオの利用は当該講義関係者の範囲にとどまっていたが、こちらはキャンパス内の誰もがWebを通じて視聴できるという点が質的にまったく異なっている。

(平成15年11月30日受付)

